

何もかもが商品で、画一的な流行品を大量に作って、ひたすら過剰な消費を煽られて、まだ使える物もゴミとしてその多くを捨て去る現代の都市社会をカリユグの終わり、言い換えれば先真文明の時代と仮設してみた。個々の人間も、集団としての人びとすらも、今は商品のように扱われている。素晴らしい出来栄の作品も、一時の流行が過ぎればあっさり捨てられていく。学者人生を生きてきたが、蓄積してきた学問も商品、賞味期限は短く、学生たちに消費されてすぐに捨てられる。

誰も読まないホームページを作っているが、ウェブ検索をしてみると、ライフスタイルとか生き方という題のインタビューやエッセイについては、最近、少数の方に読まれた形跡がある。ますます不安定な時代の深みに向かっていくようで、皆さん心配になり、改めて生き方や暮らしぶりを考えるようになった方々がおいでになるのだろうか。私のお勧めは、大量生産大量消費大量廃棄に抗うには、自分は自分だと個人主義を深化させることだ。簡単には「食えないヤツ」になることだ。ただし、自分や家族が「食えるもの」は自分で作らなくてはならない。

そこで、「食える／食えないヤツ」を食用の栽培植物にたとえてみよう。もちろん例外は少しあるが、とりあえず横に置いておくことにする。植物は人間に食べられるためにだけ存在してきたのではないので、棘もあれば毒もある。それを人間が植物との「長期信用契約」で、主に食べるために栽培化した一群の植物を栽培植物（食物）という。もちろん、栽培植物には衣類や住居、薬用などのための工芸作物や建材、多様な素材もあるが、ここでは分かり易さのために食物に限定して話を進める。

果物のリンゴやイチジクはいくらでも生でそのまま食べられる。野菜は少しなら生でも食べられるし、加熱すればたくさん美味しく食べられる。芋は大方過熱しないと食べられない。豆はほとんど生では食べられず、潤かしてから加熱するか、時には毒抜きもいる。穀物は加工・調整してから、加熱して食べられるようになる。要するに、穀物は簡単には「食えないヤツ」なのだ。

さて、生の食用植物を食べやすさの順に示してみたが、貯蔵性や移動性からみると、その順は逆になる。まず、貯蔵性から見ると、果物や野菜は腐りやすい、芋は半年くらいはなんとか貯蔵（休眠）できるだろうが、さらに豆や穀物は乾燥すれば長期貯蔵ができる。したがって、移動性から見ると、果物、野菜、芋は水分が多く、腐りやすいし重い。一方、豆と穀物はかなり乾燥でき、軽くなり、よほど長期にわたって蓄積できるし、移動も楽である。

すべての栽培植物が人間にとって大切であるが、貯蔵性・移動性のよい穀物が栽培化されるに及んで、人間の群れは家族から、それを超える大きな集団を形成して、権力や権威をもつ文明を発生させた。宮殿を造る人々にも侵略する軍隊にも、穀物は食料として重宝なのだ。ちなみに、黍（キビ）はジンギスカンの軍隊の兵糧であった。現在は、

生きる糧として栽培することだけではなく、さらに生産性を増した穀物コムギ、イネ、トウモロコシが人間と家畜らの食糧の半分を占め、世界を支配する戦略的金儲けの商品になっている。ここに大量生産大量消費大量廃棄の文明は非循環的に依拠をしている。

これらに対して、黍はユーラシア大陸の東西、ドイツと中国で 8000 年以上前の新石器時代遺跡から出土している。美しい流麗な草姿をしている穀物だ。歴史も古しい、必ずしも貧しい人々の食料ではなかった。誰もが等しく生きるために食べ、文明を進めた点は、いわゆる三大穀物に引けを取ることはないのだ。世界的な商品ではないが、今でも各地で家族が健康に生きるための食料として引き継がれている。原沢文庫の中に、中国最古の農書『汜勝之書』（紀元前一世紀）を見つけた。この中には、アワ、キビ、ヒエの栽培法が解説してある。

黍などの雑穀を栽培することは初めての人でもほどほどにでき、収穫も期待できる。しかし、脱穀、風選、粃摺り、精白などの加工工程で、家庭用の道具も技術もあまりないので、すぐに行き詰まる。簡単な方法は、粃殻付きのまま焼くのだ。そうすると加熱もでき、少しポップもする。篩でふるえば、もうこれで食べられる。今でも、モンゴルではミルクティに入れてこれを食べている。さらに、何とか加工できても、つぎの難関はどのように調理するかだ。黍の調理法も稲に劣らずたくさんあるが、こうした伝統的な郷土食が継承されていないので、持て余してしまう。稲と混炊するか、煮てからサラダに加えるかでは、あまり能がない。伝統的知識体系における生物文化多様性の重要さを緊急課題として認知し、対応せねばならない。

さあ本題、こうした滅びに至る現代文明に、どのように抗い、先真文明の時代へと向かうかだ。黍のように生きることだと朝の寝ぼけ頭で思いついた。簡単には「食えないヤツ」になればよいのだ。歳を重ねると、多くの経験を積むので知っていることや自分の見解があり、つい口を出しおしゃべりが過ぎて、もしかしたら、まるで威圧するかのよう若者の出鼻を挫いているのではないのか。若者の意見をただ聞くべきだろう。老年者は話さないで、書き残すのが良い。話は聞かざるを得ないが、文は読まなくても済む。読みたい人だけが読めばよい。本を読まない人が多いようだが、それも当人の選択で、私にできることは日本村塾ゼミで古典的な本の読書会をすることだ。携帯電話に対する PC メールのようなものだ。音がしないので、でなくてもよい。好きな時に読めばよいし、迷惑メールとしてごみ箱に入れてもよい。

だが、少なからぬ若者の無知と無恥には我慢ならない時もある。嫌われるのは構わないが、彼らの発言を阻害するようではこれこそ老害だ。そうはいっても、その場において、聞くような良い内容がなければ、職業的義務感がないかぎり、黙って座っていることは非常に苦痛である。名利にこだわらないと決めていても、忘れられた存在、出番のなさが漠然と誇りを傷つけもする。こうした感情は美しくないもので、売らない作家・百姓という仕事はとても良いと考えた。人それぞれに生き方がある。私の第 3 の人生はこれで暮らすことにし、大方の社会的付き合いを無くすことにした。心の平安が持てるし、そ

れよりも個人史の記憶が薄れないうちに、経験を記述しておくことは、自由な研究のために多額の公共の研究費や家族の生活費を使ったことへの必要な責任であろう。また、ほかごとに関わるよりも、資料を整理して、公開できるような作業をすることが後代の人びとのために役立つのだろう。そういう生き方を選んだと言っておこう。